

世話になった。紙上を借りて深く感謝したい。

▶ 金田典子

総科生としての意識といえば他学部などに負けるものかという意欲などは人一倍強かったように感じる。事実、総科の先輩で教育学部の人以上に教育に対して情熱をもち、よりよい教師をめざしてこの学部を去っていった人も少なくないと思う。自分はあるひとつの信条というものをもってやってきたつもりであるが、いまだ不十分であると感じている。何かひとつでいい、どんな小さなことでもいい、人に負けないくらいの熱意をもって打ちこめるもの、あるいは人を持つべきだと思う。後輩に一言言えと言われたら、総科生であるということ誇りに思えるようがんばってほしいと思う。

アンケートを終えて

万感胸にあり余るものを抱きつつ、卒業を迎えられる方、また、残る事を決心された先輩諸氏に、自らの4年間、あるいは5年間の大学生活から、学部に対するものまでの所感を、ここに吐露してもらった。現実直視の学部批判から、かみしめるように語られる各々の行間から、後輩である私たちは、創設間もない、不備の体制の中で、必死に自らの存在を追い求めてこられたひたむきな姿と、私たち、後に続くものへの限りない期待がよせられていることを感ぜずにはおれない。

私たちは、この現実直視の真摯な姿勢と、自己の存在を追い求めたその経験とを、自らの糧として引き継いでいかねばならないだろう。また、新しいがゆえの陥穽という内部矛盾を抱えた本学部においては、そのことを通じてでなければ、新しい学部にもふさわしい学問の創造性も、新しい生き方の発見の可能性をも、自分のものとすることはできないだろう。最後に、卒論等で忙しいなか、おしみなくアンケートをお寄せ下さった先輩のみなさんに、お礼を述べて本企画のおわりとします。

(編集委員、浜田、石田)



卒論を書き終えて

「自分の卒論について」

環境科学コース 太田憲良

今やっている卒論に落ち着くまでには、いろいろいきさつがある。入学当時、漠然と教員か公務員、または公害防止管理者になりたいと思っていた。小学校から田舎育ちの自分にとって、田畑や小川が次々と宅地、工場、レジャー用地に変貌し、かつ汚されていく姿を目の当たりにすると無性に腹が立った。いつしか、自然の中で、また自然を相手にする職業につきたいと願うようになり、将来は、富士山測候所勤務か、自然保護関係の職をやろうと思った。高3時代の頃、光化学スモッグや赤潮が夏に連日の如く紙面に現われ、従来の、重金属・毒物・ヘドロなどのたれ流しによる悪臭・漁業汚染問題に加わる新しい現象が続出し、いずれ人命も脅かされる予感があり、自然保護・公害防止技術の必要性を痛感した。

ちょうどその頃、気象に興味を持っていたので、大気汚染の実態とその原因、さらにその防止技術に関して、いろいろ本をあさった。光化学スモッグの実体、予想される原因物質、発生条件などいろいろ書いてあったが、どういう気象条件(気圧配置など)で発生する確率が高いかは、触れておらず、興味の一つになった。その他さまざまな発生条件を集成して、大気汚染発生予報を可能にし、また発生機構を解明して防止策を作りたいと考えた。

しかし、これを実現するには、気象学と、より綿密な物質循環のデータを入手するための分析技術や、従来のデータを基に、これからの予想をシュミレートする処理技術が必要になってくる。そのため3年の実験で、地学に属していたが、分析をやりたいため化学をとった。

4年になって、研究分野を、大気圏から水圏に変え、赤潮プランクトンがなぜ異常増殖するのか、その励起要因を探ろうと考えた。現在 N_2 とか P は栄養源として知られているが、ビタミン B_{12} 、 Fe 、 Mn なども誘発物質として注目されており、さまざまな要素がからみ合って生じている。特に、生物に必要な金属と増殖との関連を見ていきたいと思っている。そしてある種のプランクトンが優先的に増殖する機構を明らかにし、発生予報、防止策に役立てたいと思う。また将来、海の過栄養化に伴う漁場操失をなくすため、 N_2 ・ P など栄養塩の除去を含む汚水処

理の分野も手がけてみたいと思っている。

以上自分が、今まで何をしていたかをずらずら述べたが、とにかくこの目標達成を将来の指針として、現在「モリブデンの海洋生物における濃縮」というテーマに取り組んでいる。モリブデンは、生物の必須金属の1つであり、増殖するのに体内に取り込まれる可能性がある。そこでプランクトン中の濃縮係数を求めて海水と生体間の移動を調べ、増殖時におけるモリブデンの必要性を確かめる基礎研究としていきたいと思う。

卒論について、みなさんへのアドバイスは、早目に自分のやりたい事を見つけ、それをやるのにもっともふさわしい先生を尋ね、将来これこれをやるには、どんな勉強をすればよいかを質問し、3年の頃からその関係の読本なり実習なりしておいてほしいということです。そうすれば4年で助かるでしょう。みんなの中から、将来の日本の星が誕生することを切に祈ってやみません。「求めよ、されば開かれん。」

「卒業論文に取り組んでみて」

環境科学コース 住野寿彦

ほんとうは「卒論を終えるにあたって」などと、スマートなテーマで書きたいところなのだが、今まさに、卒論のための実験データを出しつつある私にとって、実をいうと、この数週間が正念場なのである。それで、「卒業論文に取り組んでみて」という今の自分よりふさわしい題で書かせていただきたいと思う。

前置きはさておき、まず、実験を始めたころの失敗談を少し書いてみたい。ある日、Zeatin(植物ホルモンであるサイトカイニン的一种)という試薬のメタノール溶液を作るようにと言われ、いそいそとその試薬びんやら、薬包紙やら、その他必要なものをそろえて天秤室に向かったのである。そして、何げなく一さじ取って、その重量を秤り、紙には十ミリグラム少々の数値が書きこまれた。それを、五十ミリリター近くメタノールに溶かしたのである。なぜなら、濃度はすでに教えられていたからである。そこまでは、順調に事が運ばれたかのようであった。ところが、それを見た先生が、

「いやに量が多いね。数ミリリターしかいらなののに、いったい何ミリグラム取ったんだね。」と尋ねられたのである。

「はい、十ミリグラム少々ですから……………」

「ええ、十ミリグラムも。これいったい、いくらするか知ってるの。」

「いいえ。」

「五ミリグラム六千二百円なんだよ。」

「ええ、そんなに高価なものだったんですか?」
ついに、話は全部使ってしまうくらい実験をするか(この時の実験では、1回に数マイクロリターしか用いなかったから一年どころか、何年分もの量になる)、飲んで胃袋に使用させねばならないかのような雰囲気になりかけたのであった。そして、数か月たった今も、実験室の冷蔵庫には、その時の三角フラスコが、でんとすわっている。このような失敗は、だれしも1回や2回は、経験するようである。(と先生が、慰めて下さったのだが)

その他にも、いろいろと失敗談はあるけれども、この最終学年にある卒業論文に取り組んでみて、その価値なり、意義なりを、思うに任せていくつかあげてみたい。

まず第一に、上述の失敗談にもあるように、この実験をするのにいくらのお金がかかるかといった経済面での認識が深まることであろう。これは、将来どのようなところへ進むようになっても役に立つ、また重要なことではないかと思う。

第二に、指導教官の先生の指導により、的確な判断力が養われるようになることであろう。これは、経済的な面だけでなく、次に行なう実験をどのようにするかを決めるとき必ず要求されることである。

このように書くと、読者の方、特にこれから卒論を行なう一・二・三年生の方は、卒論に取り組むだけですぐにこのようなことが身につくと思われるかもしれないけれど、しかし、私などは、この二つのことに関して、失敗の連続なのである。

確かに、大学生活のしめくくりとして、りっぱな卒論を書きたいとだれも思うことであるけれど、私は、たとえすぐれた結果が得られなくても、卒論を通して得られる様々な経験から、社会に巣立って行く時に、役立つ多くのことを身につけられることを卒論の持っている役割だと思う。

「卒論を書き終えて」

地域文化コース 河合恵子

ある先輩から、『卒論というものは自分の力の限界を知る絶好の材料である。』ということを知った。実際書いてみて、本当にその通りだとしみじみ思う。今できあがって私の目の前にあるものが、決してごまかしのきかない私の姿である。自分の論理的思考力のなさ、構成力の弱さ、表現力の乏しさ等、自分の力が恐ろしいくらい歴然と表われている。これが

最終的な自分の姿ではなく、これを人生の第一段階として、以後の人生はその反省をもとに生きるのだと思っていても、やはり後悔と恥づかしさはどうぬぐいようもない。

しかし私の場合、卒論を書く過程でやってよかったと言えることが、一つだけある。それはフィールドワーク（現地調査）に主な時間、エネルギーを費やしたことである。具体的な、自分の問題意識にそったフィールドの対象地、対象者、質問項目等の決定の仕方点では、数えあげればきりのないくらい反省する点があるのだが、それらをここでは一たん棚上げにして、これから卒論を書く皆さんがフィールドをする場合、どういう点に気をつけた方がよいか、私の短い経験の中から述べてみたい。

1. テーマとフィールド対象地、対象者の決定、事前準備

テーマが決まったら、そのために最も適当な例となる調査地を決定しなければならない。それ以前に調査された報告書や研究書に少なくとも一通りは目を通すことが必要である。ここで基礎的な知識を仕入れると同時に、自分のほしい資料収集の仕方考えるのである。

私の場合、はじめのうち問題意識をしばらくすることができなかつたため、テーマは「広島府の神楽」という、少々漠然としたものとした。広島府の神楽研究はまだまだはじまったばかりで、基礎的な資料収集さえ不十分である。そのため不可能とは思いますが、フィールドの対象地は、一応県下全域におき、決して実際にはまわりきれないであろう県下全域を網羅するために、それ以前の研究書にある神楽団名簿の代表者を対象に、アンケートを送った。お金が少々多くかかったが、やはりやってよかったと思う。なぜならば、もちろん基礎資料集めになったこともあるが、それ以上に直接面接するための手がかりになったということがいえるのである。というのは、返ってきたアンケートの中からとりわけ記述の丁寧なもの、書いた人が話好きそうなものを選んで面接することができたからである。それにアンケートの依頼書に自分の今調査の趣旨をまとめて書いておいたので、はじめて会っても相手側はちゃんと私の身分、調査の意図を知っていたので、警戒される度合が少なかったと言えると思う。

このように様々な報告書、研究書などをもとに、フィールドの土地、人を決定したら、事前に対象者に電話をするか手紙を書くかして、相手の都合のい

い日時を聞いた上で出かけることにする。なるべく所要時間や道順、交通手段などを聞いておいた方がよい。地図の上では近いからすぐ行けるだろうと思っていると、意外にバスが日に数本しか通っていませんかったりして、約束の時間に大幅に遅れてしまうこともあるからである。

それと出かける前に地図をみて、その土地のある程度の地形や地名を頭の中へ入れておくことも必要である。地元の話の中に、当然のこととして何の説明もなく地名がポンポンでてる。人の名か地名か判断しかねることがよくあった。

2. 直接面接

聞きたいことはあらかじめリストを作っておくべきだが、話のすすみ具合によって臨機応変に関連ある事項を質問してゆくのがよい。一つ一つの質問を羅列的に問いかけるのではなく、あくまで一続きの話の中で自分の聞きたいことが全部聞けるようになることが理想的である。

話をする場合、ことばの問題がある。きちんとした標準語で、最高の尊敬語を使う必要は全くない。面接において最も大切なことは、調査者としての自分と被調査者としての相手の差をいかにちぢめ、相手の持っているものをどれだけ多くひきだすかということであると思う。だからむしろできるだけ早くその土地のことばを使い、方言、アクセント等をのみこんで、なるべくそれをまねるようにして話す方が必要だと思う。

ところがそう簡単に今まで20年も使ってきたことばを変えられるはずがない。私は、広島とは相当ことばの違う富山県出身である。四年間の広島での生活で少しはこちらのことばに慣れたとはいえない聞いてわかる程度で、自分で言えるわけではない。アクセントのちがいが大きく、話の途中でお互い相手の言う意味がわからず気まずい雰囲気になったことも度々あった。

3. 面接のあと

必ず礼状をだすこと。どんなに小さなことでもお世話になった人には必ず必要である。時期はなるべく早い方がよい。葉書き一枚でも、形式的な堅い礼文だけでなく、その人から聞いたことに少しでもふれた文も書き加える方がよい。（感想とか、他の所でも同じようなものがあったとか…… etc.）

すぐにお世話になった人に対しては、もらった資料、聞いた話などを、自分の論構成の上でどういうふうに使ひ、どういう結論を導いたか、ということ

を知らせることも必要だと思う。

以上、思いつくままに書いてきたが『フィールドワークの方法』などという題名の本にきつとこれより丁寧なりっぱな調査方法、注意事項等が書いてあるだろうから、必ずそれを参考にするように。

最後にもう一つ、面接に直接には関係ないが一般的心がまえとして、個人的に自宅をたずねてゆけば、必ず何か食べ物や飲み物をだして下さる。そういうものは、なるべく遠慮なく食べたり飲んだりしていいと思う。あまりズーズーしく要求することはもちろんいけないが、遠慮しすぎるのも決してよくない。あるおうちへ行った時、はいる早々、「うちには遠慮したり、おべんちゃらを使うような人間はいれんのやぞ」と言われた。そこのおうちで一晩泊めてもらったのだが、御主人はじめ家族の皆さんは、アッサリしていて何の気がねもない家だった。

本当にフィールドすることによっていろいろな人と話せたり、いろいろな家庭を見てまわることができた。(なにしろ神楽を実際に舞うのを見ていると、終わるのが夜中になるので、だれかの家へ泊めてもらわざるを得なかったのだ)おかげで神楽以外のこともいろいろ教わることができた。あるおうちへ泊まった時、神楽の翌日まつたけ狩りにつれていってもらえた。山へ登り、まつたけが実際にはえているのを見ることも、それをとることもはじめての経験だった。まつたけはどこにでもスクッとほえているものではなく、松の木のある下の影あたりに、木の葉に埋もれて地面全体をもちあげるようにしてほえているものだとはじめて知った。

あるところではおばあさんにたばこの空箱で作るペーパークラフトを教わった。半日ずうっと二人でテーブルに向かいあってすわり、戦争中の苦しかった話や、楽しかった思い出など、いろいろなことを話してもらった。(思い出話をしてもらう際は、刑事コロンボではないが、「うちのおばあちゃんは…」とよく言ってますが…)というふうは何らかの例をだせば、相手からもスムーズに返事が返ってくる。

また多くの人から帰りに「おみやげ」をもらった。お弁当あり、柿あり、トマトあり、まつたけあり。まったく、忙しい時間をさいて話をして下さっただけでなく、他にできることなら何んでもしてやろうという好意に満ちあふれた人ばかりだった。

フィールドするには、お金と時間と知らない人に会うという大変な精神的緊張が要求される。(この精神的緊張の度合は個人によって大きな差があるか

もしれない。少なくとも私の場合には、実際神楽を二時間見る(記録をとったり、テープをまわしたりしながら)のと、舞っている人に15分間話を聞くのでは、前者の方により多くのエネルギーを要したと思う)しかし、かえてくるものはとてつもなく大きい。部屋の中で書物を読んでいては決して得られないものだったと思う。

ただ、今思うことは、そういう人達の親切を論文に十分いかしきれなかった私の力不足と努力不足である。しかしこの数か月のフィールドで得た経験は、卒論という短期的なものだけでなく、私のこれからの人生においても何らかの形でいかせるものだと思う。またいかしてゆくことが、アンケートを書いて下さったり、直接面接に応じて下さった神楽団の代表者の方、また宿泊の世話をして下さいましたその家族の方々に対する唯一のお礼だと思う。

地域文化コースの中でも日本以外のところはフィールドすることはむづかしいかもしれないが、何らかの機会に大学以外の場で、世代のちがった人達と話してみることもおもしろいと思う。

フィールドすること、だれかと話すこと、是非おすすめます。

「卒論雑感」

地域文化コース 佐々木克之

「卒論の書き方」ということを頼まれたのであるが、私には書く能力は無い。後輩の為とるのであれば尚更である。

第一、卒論のhow toが存在するはずはないと思っているし、よしんば有ったとしても、後輩にはそのような方法を駆使して書いて欲しくないという気持がある。

以下は、私の卒論を終えての雑感である。12月24日、午後11時47分が私の筆の止んだ時間であるが、その時の最初の感じは何と云っても、「終わった。もうこれ以上はやらないぞ。」というのが正直なところである。大仕事をやり終えたという満足感よりも、「もうこれでいい。」という半ば諦めにも似た気持と卒論提出という通過点を早く突破したいという気持がそれであった。そして実際にそれは加筆修正しないままに製本、提出されたのである。

卒論は、テーマを先決することが大事であるが、テーマが決まったからと言って即座に仕事に取りかかれるものでもないように思う。S先生は私達に、卒論の筆が進むのはそれなりの「時期」があるとアドバイスして下さったが、まさにその通りである。